

凌濛初と評点

笠見弥生

はじめに

明末の文人凌濛初（一五八〇～一六四〇）は短篇白話小説集「二拍」と『拍案驚奇』および『二刻拍案驚奇』の出版で広く知られているが、彼の功績はこれだけではない。凌濛初は幅広い活躍をしていた人物で、役人として、或いは出版者としてなど、いくつもの顔をもっていた。その一つに、評点に関する活動が挙げられる。評点とは、眉批や本文行間の夾批、圈点等の総称で、時に「批点」等とも呼ばれる。凌濛初は朱墨套印の評点本を数多く出版しており、自ら評点を付した書籍も少なくない。先にあげた、凌濛初の最も有名な作品であろう「二拍」についても、本文のテキストを自分で編んだうえに、自ら評点を施している。¹

凌濛初による評点についてはいくつかの論考がある。たとえば「二拍」の評語についていえば、作者と読者の視点をゆれ動きながらのびのびと評点を付していること²、読者に対して理想的な読解方法を提示する役割を与えられていること³などが指摘されている。圈点についてはあまり関心

1 『拍案驚奇』の場合、封面に「即空観主人評閱出像小説」とあり、即空観主人こと凌濛初自身によって評点が付されたことが明記されている。『二刻拍案驚奇』の場合、現存最古の刊本である内閣文庫所蔵の尚友堂刊本が後修本であるらしいこと、そしてその封面が失われていることにより、評点者が明記されている箇所が見当たらないが、章培恒氏が、『二刻』巻六で『剪燈新話』から引いた手紙の眉批に「此原傳筆也。幽明相通、一訴情事。何至虛文可厭乃爾。老學究伎倆。然改之無端、姑仍其舊。」とあることを根拠に『二刻』の評点もまた凌濛初自身によるものであることを指摘している。章培恒「影印『二刻拍案驚奇』序」（『二刻拍案驚奇』上海古籍出版社、一九八五）参照。

2 日下翠「元雜劇『看錢奴』の演変」（『水門 — 言葉と歴史 —』十四、水門の会、一九八五）、「『拍案驚奇』の評釈について」（『東方』五十四、東方書店、一九八五）、「即空観評閱『拍案驚奇』について」（『文学論輯』三十九、九州大学教養部文学研究会、一九九四）。

3 村田和弘「『拍案驚奇』の眉批について — 作者・テキスト・評者の関係をめぐって —」（『中国文化：研究と教育：漢文学会会報』五十六、筑波大学、一九九八）。

がもたれていないようであるが、物語の展開上特に重要な伏線となる箇所や、講釈師が聴衆に模した読者に対して直接主張や見解を語る場面はしばしば圈点によって強調されており、評語のみならず圈点も作者の意図を余すところなく読者に伝えるためのツールとして用いられているように見受けられる。⁴ また他の作品に付された評語については、たとえば『世説新語』の評語については、道徳的な評価が多数を占めるが、一部小説創作の手法などに言及したものなども見られると指摘がある。⁵ しかしながら、趙紅娟『拍案驚奇—凌濛初伝』（浙江人民出版社、二〇〇七）や馮保善『凌濛初研究』（人民文学出版社、二〇〇九）といった凌濛初に関する専著に評点に関する章が設けられていないことからもうかがえるように、凌濛初の評点に関する活動は、未だ十分に注目されていないようである。

本稿では、個々の作品に付された評点の性質や役割を検討する前提として、凌濛初が評点というものをどうとらえていたのかについて考えたい。凌濛初は、自ら出版した書籍のところどころに、評点に対する見解を書き残している。それらについては表野和江氏が断片的に取り上げているものの⁶、俎上にあげられた記述はごく一部であり、未だ検討の余地があるように思われる。そこで表野氏の研究を参考にしながら、凌濛初の評点に対する見解について再検討を試みたい。

一、凌氏一族と評点

本題に入る前に、凌濛初と評点のかかわりを確認しておきたい。そもそも凌濛初が評点本を出版するようになった背景には、当時における評点本の流行、そして凌氏一族によって行われていた出版活動に評点本が深く関わっていたことがあげられよう。

凌濛初が活躍したのは、白話小説を含めた様々な種類の評点本が盛んに

4 拙稿「許容された不義密通——凌濛初「二拍」を中心に」（『日本中国学会報』六十九、二〇一七）でもその一例を取り上げた。

5 『世説新語』の評点に関しては、潘建国「凌濛初刊刻・評点『世説新語』考述」（『上海師範大学学报（哲学社会科学版）』第三十三卷第五期、二〇〇四）がある。

6 表野和江「『鼓吹』考」（『藝文研究』八〇、二〇〇一）。

出版された時代のことであった。このことについては、高津孝「明代評点考」(『東方学会創立五十周年記念東方学論集』、一九九七)、「宋元評点考」(『人文学科論集』、鹿児島大学法文学部、一九九〇)、丸山浩明「評林本隆盛史略」(『二松学舎大学人文論叢』五十四、一九九五)、譚帆『中国小説評点研究』(華東師範大学出版社、二〇〇一)、David L. Rolston, *Traditional Chinese Fiction Commentary: Reading between the lines*, Stanford University Press, 1997. 等の研究がある。それらによれば、評点の歴史は少なくとも宋代にまでさかのぼり、はじめは文を対象として始まり、対象が徐々に拡大していったという。そして明代に入ると『史記』をはじめとする歴史書の評点本・評林本が盛んになり、更に明代後期になって白話歴史小説の評点本が刊行されたのをきっかけとして、評点の対象は白話小説全体に広がる。その後、いわゆる李卓吾(一五二七～一六〇二)批評本が広く出回るなど、白話小説に対する評点が発達しに行われるようになった。凌濛初が活躍したのはその少しあと、評点本がまさに隆盛の時代のことである。

そして、凌濛初と評点とのかかわりは、ただ評点本隆盛の時代に生きていたというだけではない。凌濛初の出身地である湖州では南宋の時代から刻書業が行われ、明末に至って蘇州と肩を並べるまでになった。凌氏一族も凌濛初の祖父が挙人、父が進士というれっきとした読書人の家柄でありながら、出版業にもたずさわっていた。この湖州に住む凌氏一族は、凌濛初の四代前、つまり高祖父の凌敷が閔氏の婿になったことにはじまり、閔氏とは代々婚姻関係を結んでいた。両氏は姻戚関係にあったと同時に、出版業においてはライバル関係にあって互いに競い合い、結果として出版業の発展を加速していたのである。

凌氏一族の出版活動は、凌濛初の父迪知の代になって本格化した。凌迪知は万暦三年(一五七五)から七年(一五七九)にかけて、『名世類苑』、『兩漢雋言』、『楚騷綺語』、『左国諛詞』、『太史華句』、『文選錦字』、『万姓統譜』等自らの著述を続々と世に出した。⁷そして凌濛初の伯父にあたる凌稚隆

7 荒木猛「凌濛初の家系とその生涯」(東北大学文学会『文化』四十四—一、二、一九八〇)。

による『史記評林』や『漢書評林』が成功をおさめる。⁸ 万暦十年（一五八二）から三十年（一六〇二）頃を中心に、歴史書や医書などの本文の上に眉欄を設けて評語を書き加え、「評林」の名を冠して出版することが流行したが、『史記評林』、『漢書評林』もそのひとつで、ともに本文上部の眉欄に評語が並べられている。⁹ いずれものちに江戸・明治期の日本でも刊行されるなど、広く読まれたようである。つまり、凌濛初が生まれる以前から、凌氏一族の出版活動は評点と少なからずかわりをもっていたのである。

二、凌濛初と評点本の出版

凌濛初の代になると、凌氏一族は続々と評点本を出版するようになる。当時、凌濛初は凌氏一族の出版活動の中でも中心的役割を果たしていたようである。上海図書館蔵『凌氏宗譜』にある世系表の凌濛初のところには、その略歴とともに「著作甚多」と記されている。¹⁰ 書籍の著述・出版にかかわった人が一族の中に多数いるにもかかわらず、このような記述は他には見られないから、凌濛初が書籍の著述・出版にとりわけ著しい功績をあげていたことを示している。

凌濛初は万暦八年（一五八〇）に生まれた。¹¹ 十二歳で県学に入学、十八歳で廩膳生になり、科挙に向けて上々の滑り出しをしたかのように見えた。しかし結局落第を繰り返して生涯科挙に合格することはなく、崇禎七年（一六三四）に上海県丞になった。凌濛初が出版活動を盛んに行っていたのは、万暦三十年頃から上海県丞になる崇禎七年までのことと考えられる。この頃の凌濛初は南京に居を構えていて、三十種類ほどの書籍を出版したことが確認されている。最初期に出版されたのは、万暦年間の『後

8 凌氏一族の出版活動については、表野和江「明末呉興凌氏刻書活動考 — 凌濛初と出版 —」（『日本中国学会報』五〇、一九九八）、周興陸「明代刻書家閔、凌二姓世系考」（『浙江社会科学』二〇〇八年第七期）等参照。

9 丸山浩明「評林本隆盛史略」（『二松学舎大学人文論叢』五十四、一九九五）。

10 凌士麟纂修『凌氏宗譜』「明都察院安然公第五子怡雲公晟舍支世系」、上海図書館蔵鈔本第三冊。

11 以下、凌濛初の経歴については趙紅娟『拍案驚奇 — 凌濛初伝』（浙江人民出版社、二〇〇七）「凌濛初大事年表」、荒木猛「凌濛初の家系とその生涯」（注7参照）を参照した。

漢書纂』と『世説新語』で、万暦三十六年頃には、自らの戯曲を湯顯祖に送るなど、戯曲の創作も行っている。

凌迪知、稚隆らの活躍により、凌氏がやや優勢を保っていたかのように見えた凌氏、閔氏の出版活動であるが、万暦四十四年（一六一六）に、閔氏一族の一人である閔齊伋が朱墨套印の形で『春秋左傳』十五巻を刊行したことで、彼らの出版活動に大きな変化が生じる。これは朱墨套印という印刷形式と評点を融合させたもので、本文のテキストを墨色で印刷し、圈点や評語を朱色で印刷して見やすくするという、まさに評点本にうってつけの版式である。¹² その数年後には凌濛初ら凌氏一族も次々と朱墨套印の評点本を刊行しはじめる。その後さらに、評者ごとに色分けをする三色以上の套印も行われるようになり、これ以降は凌氏、閔氏ともにもっぱら套印本に注力し、明末にかけて套印本の出版で名を馳せることとなった。明末の二十年ほどの間に、凌氏と閔氏によって出版された套印本は、百三四十種とも百四十五種以上ともいわれる。¹³

そのうち少なくとも二十三種は凌濛初による。¹⁴ つまり凌濛初の出版した書物のほとんどが朱墨套印本で、わかっているだけでも天啓元年（一六二一）には『東坡禪喜集』と『山谷禪喜集』を套印本の形で刊行している。その後、天啓二年（一六二二）には『詩逆』、天啓六年（一六二六）頃に『南音三籟』、崇禎四年（一六三一）に『聖門傳詩嫡冢』が出版されている。そのほか凌濛初が出版にかかわった書物の多くは出版年が記されていないが、あとに取り上げる『西廂記』、『琵琶記』、『李長吉歌詩』を含め、凌濛初が朱墨套印の形で出版した他の書物も、万暦四十四年に閔齊伋が套印の評点本を世に出してから、崇禎七年に自身が上海県丞になるまで

12 もっとも、著名な小説の評点本の大多数が墨刊本であることからわかるように、套印評点本はさほど広がりを見せなかった。陳正宏「套印与評点関係之再検討」（『文学遺産』、二〇一〇年第六期）参照。

13 王清原「武進陶氏藏閔凌刻套版書源流考」（上海図書館歴史文献研究所編『歴史文献』第十輯、二〇〇六）。

14 表野和江「明末呉興凌氏刻書活動考 — 凌濛初と出版 —」（注8参照）には、凌濛初による套印本が二十五種挙げられているが、うち二種は留保されている。

の間に出版されたものと思しい。なお、凌氏ではなく尚友堂という書肆から出されたものであるが、いわゆる「二拍」もこの頃に執筆されたもので、天啓七年（一六二七）に『拍案驚奇』、崇禎五年（一六三二）に『二刻拍案驚奇』を刊行している。凌濛初の出版した書物は曲や詩文集が多いのが特徴で、¹⁵ 自らが高く評価する劉辰翁の評点本を多数出版したり、挿絵の質にこだわったり、外地に赴いて蔵書家からテキストを借りたりと、よりよい書籍を出版するためにさまざまな努力をしていた¹⁶。

更に凌濛初は自らが出版する評点本の評点部分の質にも気を配り、自ら積極的に執筆・編纂を行っている。伯父の凌稚隆の評林本における成功体験が、凌濛初を自然と評点の執筆・編纂に向かわせたのだろうか。現在出版されている唯一の凌濛初の全集である、魏同賢・安平秋主編『凌濛初全集』（鳳凰出版社、二〇一〇）には、凌濛初自身の評語が確認できる作品が十二種収録されている。そのうち凌濛初のみの評語で構成されているのが『拍案驚奇』、『二刻拍案驚奇』、『琵琶記』、『南音三籟』、『大方廣圓覺修多羅了義經』、『維摩詰所説經』¹⁷ の六種、他人の評語を集めた上で自らの評語を加えたものが『世説新語』（鼓吹）¹⁸（圈点なし）、『西廂記』、『聖門傳詩嫡冢』、『孔門兩弟子言詩翼』、『詩逆』、『蘇老泉文集』の六種である。

井上進氏は凌濛初と閔齊伋を「儒にして賈を兼ねた者」、つまり士人でありながら出版を通じて利益を得た者の代表として挙げる。彼らはれっきとした士人階級出身であるにもかかわらず、「形式自体が俗、更にこれを見た目で売ろうとしている点が俗、正統の観点からすれば俗の俗なるもの」である套印の評点本を続々と出版した。套印の評点本を扱う以上、明らか

15 王清原「武進陶氏藏閔凌刻套版書源流考」（注13参照）。

16 表野和江「明末呉興凌氏刻書活動考—凌濛初と出版—」（注8参照）。

17 但しこの二種類の仏典については、遼寧省圖書館藏陶湘舊藏閔凌刻本集成『佛教典籍五種』（中華書局、二〇一七）所収の影印本を確認しても、評点者が明記されていないようである。（『維摩詰所説經』には凌濛初の賛が付されている。）

18 凌氏は四種類の『世説新語』を出版している。凌濛初の評語が見られるのは、凌濛初による墨刊本の『世説新語三卷世説新語補四卷』で、凌濛初による「世説新語鼓吹序」が付されている。表野和江「呉興凌氏刻『世説新語』四種について」（『日本中国学会報』五十二、二〇〇〇）参照。

に営利目的の出版であるし、まして『拍案驚奇』や『二刻拍案驚奇』が営利出版物でないとはあり得ないと述べている。¹⁹ 井上氏が指摘するとおり、彼らが行っていた套印評点本の出版というのは、出版の流行の先端を追いかけ、売れる書物を追求した末にたどり着いたものであろう。凌濛初もまた、朱墨套印の評点本を多数出版したり、短篇小説集である「二拍」を編んだり、金銭的な利益を得ることを大きな目的として出版活動を行っていたことがうかがえる。出版する書籍のテキストや挿絵、更には評点部分にまで関心を向けていたのも、より売れる書籍を作るための気配りといつてよいだろう。

もっとも凌濛初のように科挙を受験するような家柄の人々が、商業活動を行っていた例は他にもある。むしろ科挙の受験を支えるためにも、一族の中に商業活動をして金をもうける人間が必要だったのである。²⁰ その意味では、凌氏一族は蔵書家等の文人ネットワークを活用して、出版業というより士大夫らしい手段で利益を得ていたといってもよいだろう。

三、最初期の出版における評点

凌濛初が生涯に出版した書籍のほとんどが評点本であり、しかもその多くは朱墨套印、或いは多色刷りの形式で出された。しかし、万暦四十四年（一六一六）に閔齊伋が套印評点本を世に出す前に出版されたと思われる万暦年間刊行の『後漢書纂』、『世説新語』（いわゆる鼓吹本）は、前者が評点なし、後者が圈点なしの形式で出された上、序や凡例には評点を真っ向から否定するかのような発言が見られる。²¹ これらの記述については表野和江氏がすでに取り上げているため、それを参考にしつつ、凌濛初が評

19 井上進『中国出版文化史—書物世界と知の風景—』（名古屋大学出版会、二〇〇二）第十四章「書籍業界の新紀元」、二五二～二五三頁。

20 寺田隆信「陝西同州の馬氏—明清時代における一郷紳の系譜」（『東洋史研究』三十三、一九七四）。

21 表野和江「『鼓吹』考」（注6参照）によれば『後漢書纂』は万暦三十四年金陵周氏刊、『世説新語』は万暦三十三年から四十七年の間の刊行であるという。また『凌濛初全集』では『後漢書纂』自刻本の刊行年を万暦三十一年から四十年の間としている。

点を否定的に述べた発言について見ていきたい。²²

『後漢書纂』は現在見ることのできる凌濛初刊行の書物の中で唯一まったく評点のない書物である。これには蘇州出身の有名文人であった王穉登（一五三五～一六一二）の序が付されており、その中で王穉登は、次のようにいう。

『後漢書』に纂無く、之を纂するは余の友凌玄房（玄房は凌濛初の字）より始まる。『後漢書』は纂すべし、『前漢』及び『史記』は纂すべからず。……蔚宗六代の人を以て漢史を撰す、其の文は靡なり、其の事は舛なり、其の義悠悠として振るわず、故に纂すべしと云ふ。……嗚呼、史の例・抄・纂・評林の書出でて、史氏の陽九に厄^{くる}しむこと甚だし。例に菹醢^{にらき}され、抄に屠割せられ、且つ纂に荆^{あしき}られ劓^{はなき}られ、評林に黥墨せらる。

（『後漢書』無纂、纂之余友凌玄房始。『後漢書』可纂、『前漢』及『史記』不可纂。……蔚宗以六代人撰漢史、其文靡、其事舛、其義悠悠而不振、故云可纂。……嗚呼、史例抄纂評林之書出、史氏厄於陽九甚矣。菹醢於例、屠割於抄、且纂劓劓、黥墨於評林。）²³

王穉登は、『後漢書』は『漢書』や『史記』と違って文が頼りなく、事実誤りがあり、解説も長年振るわないので、「纂」を出してもよいといって、凌濛初の『後漢書纂』の価値を認めている。しかしその一方で、「纂」のような史書の節略本の類に対してかなり強い不満の言葉をもらしている。史書は、「例」には殺され肉を塩漬けにされる刑のように命を奪われ、「抄」には引き裂かれ、「纂」には鼻や足を削がれ、「評林」には入れ墨をされる、というのである。「例・抄・纂」とはいずれも抜粋本、節略本の類で、「評林」は評林本のことである。たとえば『史記』について言えば、張之象（一四九六

22 表野和江「「鼓吹」考」（注6参照）。また潘建国「凌濛初刊刻・評点『世説新語』考述」（注5参照）にも一部言及がある。

23 魏同賢・安平秋主編『凌濛初全集』第九冊所収『後漢書纂』（鳳凰出版社、二〇一〇）、一頁。

～一五七七)の『太史史例』、茅坤(一五一二～一六〇一)の『史記抄』、そして凌濛初の伯父凌稚隆の『史記評林』(茅坤の序が付されている)などがある。また書名こそ違えど、凌濛初の父の凌迪知が編輯、弟の稚隆が校閲して出版された『太史華句』も『史記』の抜粋本の一つである。王稗登は万暦二十四年(一五九六)に湖州を訪れた際に凌迪知に会うなど、凌氏と長年交流があった人物なのだが、彼等の出版活動の内容についてはあまり評価していなかったのだろうか。

凌濛初は同書の凡例に次のようにいう。

書の纂有るは、故に以て觀るに便なり。纂の注を留むるは、反りて目を礙げるを爲す。妄りに圈抹を加ふるは、已に鴉塗を病む。哀評を肆ね入るは、祇だ牛汗を増すのみ。並びに敢えて仍らず、意或いは當たる有り。

(書之有纂、故以便觀。纂之留注、反爲礙目。妄加圈抹、已病鴉塗。肆入哀評、祇增牛汗。並不取仍、意或有當。) ²⁴

凌濛初もまた、やたらと圈点を施すのは著作本体を損なうことになり、批評を書き連ねることは書物の量を増やすだけだ、と述べて圈点・評語の存在を否定する。そして『後漢書纂』はまったく評点のない形式で出版された。

しかし同じ頃に出されたと思われる『世説新語』では、圈点はないものの、大量の眉批が付されており、劉辰翁や劉応登ら複数の評者による評語を集めた上で、自らも「凌濛初曰」にはじまる評語を二百条ほど書き加えている。評語の内容をみると、テキストの校勘に関するものや語義の解釈の類も少なくないが、こと凌濛初自身の評語についていえば、物語に対する感慨を記したものが多数を占めている。にもかかわらず、凌濛初はこの『世説新語』の「凡例」においても、まるで評点の存在を否定するような発言をしている。

諸書に評有るべからず。評は疣贅爲り、指枝爲り。獨り『世説』のみ

24 同前、二頁。

單詞片語、本よりは是れ譚の資にして、月旦陽秋なれば、饒舌を妨げず。況や劉會孟は譚言微中、王敬美は垢を剔り瑕を磨き、諸家の指陳皆餘蘊を發明するに足る。不佞參考し、頗る亦た功有り。前賢は獨り其の評爲るを惡む、而して之に易ふるに鼓吹を以てす、鼓吹は評に非ざるなり。

(諸書不可有評。評者爲疣贅、爲指枝。獨『世說』單詞片語、本是譚資、月旦陽秋、不妨饒舌。況劉會孟譚言微中、王敬美剔垢磨瑕、諸家指陳皆足發明餘蘊。不佞參考、頗亦有功。前賢獨惡其爲評、而易之以鼓吹、鼓吹非評也。) ²⁵

書籍というものに評はいらない、評はいはや余計な指のようなものである。ただ『世說』のみは話の種であって、人を評価したり褒貶したりするものであるから、饒舌になってもよい。しかも劉會孟こと劉辰翁の評語は簡にして要を得ており、王敬美こと王世懋²⁶は余分な垢を取り去り傷を磨く、いわば欠点を補うはたらきをしているといったように、諸家の指摘は隠された部分を明らかにできる。私はそれらを参考にしており、大変有用であった。前賢はただそれが評であることを嫌うので、「鼓吹」と改めた、「鼓吹」は評ではない、というのである。

表野和江氏は、この記述は「前賢」こと王稭登が『後漢書纂』の序に述べていたようにひどく評点を嫌っていたことを慮ったものであり、どうしても評を付したかった凌濛初が苦しい弁解をしたものであるという。²⁷ 事実その後の凌濛初は続々と評点本を出版していくことになるし、まして凌濛初が出版した他の書籍に「鼓吹」という言葉を再び使った例は見られな

25 前掲『凌濛初全集』第七冊『世說新語鼓吹』、二頁。

26 一五三六～一五八八。王世貞（一五二九～一五九三）の弟。凌濛初の兄湛初の書簡集『申椒館敝帚集』卷五（前田尊經閣文庫所藏）に王世貞・王世懋の二人にあてた書簡（主に父の代書と思しい）が収められているほか、王世貞は凌濛初の祖父の『鳳抄閣簡抄』の序や湛初の墓誌銘を寄せるなど、凌氏一族と王世貞・王世懋兄弟の交流の様子がうかがえる。

27 表野和江「「鼓吹」考」（注6参照）。

いから、『後漢書纂』、『世説新語』に書かれたこれらの見解の背景に、評点を嫌っていた王裒登への遠慮、配慮が少なからずあっただろうことは否めない。

しかし、『後漢書纂』、『世説新語』に書かれたことのすべてが王裒登におもねった発言で、単なる申し開きにすぎないとは限らないのではないか。王裒登の序に、評林本や節略本全般に対する直接的な否定の言葉が並んでいたのと比べると、凌濛初の発言にはより具体性があり、むしろこれらの記述の中に凌濛初の評点に対する見解を読み取ることができるように思われる。

まず、『世説新語』で評語を「鼓吹」という言葉で表現した理由には、凌濛初の考える評点と本文のテキストとの理想的な関係がかかわっている。或いは金の元好問の『唐詩鼓吹』などからヒントを得たのかもしれないが、凌濛初自身は同書の序において「鼓吹」という語を選んだ理由について、次のように述べている。

鼓吹なる者、『世説』の語を取りて之を名づくるなり。孝標の解を按ずるに、鼓吹は羽翼の意爲り。元美は世説を羽翼するに足る、而して世説に非ざるなり。

(鼓吹者、取『世説』語名之也。按孝標解、鼓吹爲羽翼意。元美足羽翼世説、而非『世説』也。)²⁸

これによれば、「鼓吹」という語は、『世説新語』の文中の語を選んで名づけたものである。孝標の解とは、本文卷上之上下文学篇に、

孫興公云ふ、三都・二京は、五経の鼓吹なりと。

(孫興公云、三都・二京、五経鼓吹。)

とあるのに対し、劉孝標が次のような注をつけたことをいう。

28 前掲『凌濛初全集』第七冊『世説新語鼓吹』、一頁。

此の五賦是れ經典の羽翼なるを言ふ。

（言此五賦是經典之羽翼。）²⁹

つまり、本文中にある「鼓吹」という語を、劉孝標が「羽翼」と解釈しているのに基づいて、「鼓吹」という語を用いたというのである。そして王世貞の『世説新語補』も『世説新語』本体とみなすべきではなく、あくまでも羽翼にあたる存在なのだと述べている。『世説新語補』というのは、王世貞が『世説新語』に、何良俊の『何氏語林』をもとに宋元の人物に関する記事を書き加えて刊行したものであるが、しばしばそれが『世説新語』そのものとして扱われていた。凌濛初も凡例の中で次のようにいう。

『世説』夙に善本有り、耳食する者多く捨てて『補』を重んず。

（『世説』夙有善本、耳食者多舍而重『補』。）³⁰

『世説』には古くから善本があったが、なんでも鵜呑みにしてしまう人たちはみなそれを捨てて『補』を重んじているというのである。³¹そして凌濛初はこの『世説新語』鼓吹本を刊行するにあたり、本来の『世説新語』の復元を試みたうえで、『世説新語補』に新たに加えられた内容を抜き出し、『世説新語』六巻と『世説新語補』四巻を合わせて刊行した。つまり、『世説新語補』がまるで『世説新語』そのものであるかのように扱われているが、あくまでも作品を補佐する添え物であって、評点と作品本体との関係も同様だと言っているのである。わざわざこの「羽翼」と解釈される「鼓吹」という語を選び、序においてそれをはっきりと説明している以上、凌濛初は評点というものは本体となる本文のテキストを羽翼のように補佐する存在でなければならない、という意識をもっていたはずである。

凌濛初は『後漢書纂』の凡例において、評語を「袁評」という言葉で表

29 同前、一三三頁。

30 同前、二頁。

31 江戸時代の日本でも『世説新語』よりも『世説新語補』のほうがよく読まれ、『世説新語』といえは『世説新語補』を思い浮かべるのが普通だったという。稲田篤信「和刻本『世説新語補』の書入三種」（『日本漢文学研究』八、二〇一三）参照。

現していた。直訳すれば、褒める評語、といえようか。そのことを念頭において、『世説新語』の序の冒頭部分、「諸書不可有評。評者爲疣贅、爲指枝。」という言葉を見直してみると、凌濛初は評点、或いは評語すべてを否定していたわけではなく、「鼓吹」、「羽翼」にならず、作品本文をほめたりけなしたりするばかりの評語、すなわち「批評」や「評価」をする評語の意味で、「評」という語を用いていたように読めるのではないだろうか。

そう考えれば、「前賢」はただそれが「評」であることを嫌うので「鼓吹」と改めた。「鼓吹」は評ではない」という発言にも納得がいく。前賢は、既存の評点本が本文について評価、批評を行っていることを嫌っているから、名前をよりわかりやすく改めた、というのであろう。そうでなければ、いくら王穉登を慮って名前を変えたとしてもただの言葉遊びに過ぎず、不興を買うことに変わりはないだろう。また、ここでいう前賢は主に王穉登のことを指しているのかもしれないが、評点本の類を快く思っていなかった人は少なくなかったようである。たとえば万曆四十四年（一六一六）の序をもつ何璧校本『北西廂記』の凡例にも、評点の存在を完全否定する次のような記述がある。

坊本多く圈點を用ひ、兼ねて批評を作す。或いは旁行を汚し、或いは眉額に題し、灑灑として楮に満ち、終に道を穢すに落つ。夫れ會心する者自ら法眼有り、何ぞ矮人觀場に至るや。故に並びに以て木に災ひせず。

（坊本多用圈點、兼作批評。或汚旁行、或題眉額、灑灑滿楮、終落穢道。夫會心者自有法眼、何至矮人觀場邪。故並不以災木。）³²

評点があちこちに付されていて、却ってだめにしているものが多い。きちんとわかっている人ならば他人の批評を受け売りにする必要があろうはずがない、というのである。後述するように『西廂記』にはおびただしい数の版本が残されており、いわゆる徐文長本や李卓吾本といった評点本が多数出版されていた。先に述べたように評点本は俗な書物であり、本文を自

32 『明何璧校本北西廂記』（上海古籍書店、一九六一）「凡例」。

力で読解する能力をもつ人の中に、評点本の類を嫌う人がいたであろうことは想像に難くない。凌濛初がいう「評」を嫌う前賢というのも、王穉登だけでなく同様の考えをもつ先人たちを広く念頭においたものと考えてよいだろう。

また、『世説新語』の序で、凌濛初は劉辰翁の評語が簡にして要を得ていること、そして王世懋の評語が欠点を補うはたらきをしていることを褒め、諸家の評語はみな「餘蘊」、すなわち隠された魅力を明らかにするに足ると述べているのにも、凌濛初の理想とする評点のありようが反映されていてよう。凌濛初は評点とは本文の羽翼として作品を補佐する存在であり、作品を批評、評価する「評」は不要であると考えていた。そして評語というものは、本体となる本文のテキストを補佐する存在として、作品の欠点を補ったり、隠された寓意や魅力を読者に示したりする役割を果たすべきで、それぞれの評語が簡潔で要点を端的に表現するものが理想であると考えていたのではないだろうか。

以上、凌濛初が最初期に出版した『世説新語』と『後漢書纂』における評点に対する発言からは、評点に対する否定的な見解が見られた。しかしそれらを詳しく見ていくと、評点の存在そのものを否定しているというよりも、世間に出回る既存の評点本に対する不満に近く、凌濛初が理想とする評点のあり方が浮かび上がってきた。

四、朱墨套印本における評点に対する見解

出版の最初期の評点に関する記述においては、理想とする評点を語ることよりも、評点に対する否定的な態度が前面に表れていたように見えた凌濛初であったが、その後評点に関する記述には些か変化が生じる。万曆四十四年に閔齊伋が『春秋左傳』を朱墨套印で出して数年後、凌濛初も朱墨套印本を出版するようになり、それ以降、朱墨套印の評点本を続々と出版する。それらにも評点に関する記述が散見されるが、評点そのものを否定するような姿勢は見受けられなくなる。一方、『後漢書纂』と『世説新語』から読み取ることができた凌濛初にとっての評点の理想がその後も受け継がれていることが見てとれる。

まずは、『西廂記』について見てみよう。『西廂記』は大変多くの評点や注釈が行われた戯曲であり、明代刊行の『西廂記』は少なくとも六十種以上あったという。³³ さらに当時『西廂記』と『琵琶記』という二大戯曲を刊行するというのが一種の流行で、凌濛初もこの二つの戯曲の評点本を相次いで刊行し、ともに入手した古本に忠実なテキストの刊行をめざしたと標榜しているが、少なくとも『西廂記』に関しては古本が入手できずに複数のテキストを参照し、自ら古本を仕立てた可能性が高いことが指摘されている。³⁴ しいずれにしても、数多くの版本を見比べた上で、自らの理想とする評点本を実現しようとしていた姿勢を見てとることができる。

凌濛初は眉批に王驥徳ら先人たちの評語を引用しつつ自らの評語を書き加え、更に全五本それぞれに「解證」を置き、眉批では収まりきらないような長さのある語釈や解説を入れている。この『西廂記』の「凡例」において、凌濛初は既存の『西廂記』版本に付された評語の類について、次のようにかなり具体的に不満を述べている。

評語及び解證、以て疑滯を疏し、訛謬を正すを主と爲すに非ざる無く、而して間ま其の文字の神に入る者に及ぶ。兜率宮・武陵源・九里山・天臺・藍橋の類の如きに至りては、俱に原始有りと雖も、恐らくは博雅の須むる所に非ず、故に備へず。近く又た「孤孀」二字に注して「孤は子を謂ひ、孀は母を謂ふ」と云ふ有り。此れ三尺童子いさぎよの屑しとせざる所の訓詁なり。もろもろ此の類の如きは、急よなぎ之を汰ぐ。

(評語及解證、無非以疏疑滯、正訛謬爲主、而間及其文字之入神者。至如兜率宮・武陵源・九里山・天臺・藍橋之類、雖俱有原始、恐非博雅所須、故不備。近又有注「孤孀」二字云「孤謂子、孀謂母。」此三尺童子所不屑訓詁也。諸如此類、急汰之。)³⁵

33 陳旭耀『現存明刊『西廂記』綜録』（上海古籍出版社、二〇〇七）、「前言」。

34 『『西廂記』板本の研究（下）』（『田中謙二著作集第一巻』汲古書院、二〇〇〇）。初出は『日本中国学会報』二、一九五一、原題「西廂記諸本の信憑性」。

35 『善本西廂記二種』（中華書局、二〇一七）所収凌濛初刻『西廂記』「凡例」、五頁。

前節で『世説新語』及び『後漢書纂』に残された記述から、凌濛初が評点について、作品を批評、評価する「評」ではなく作品を補佐する存在でなくてはならず、作品の欠点を補ったり、隠された寓意や魅力を読者に示したりする役割を果たすべきだと考えていたのではないかと述べた。ここでも凌濛初は、評語と解證の役割は、いずれも疑念の生じることを解決し、誤りを正すことにあるが、時にはすばらしい箇所についても言及する、と述べており、評点や注釈は本文を補佐する存在であるべきだという精神が受け継がれているということだけでなく、より具体的になったようにも見受けられる。

そして、「兜率宮・武陵源・九里山・天臺・藍橋の類」（凌濛初刊本ではそれぞれ第一折「上馬嬌」、同「賺煞」、三本二折「耍孩児」、四本一折「寄生草」、二本三折「徳勝令」に出てくる語句）のように典故があっても「博雅の士」である読者が必要としないものはつけないといい、近頃の注釈の中には「孤孀」の二字に「孤は子を謂ひ、孀は母を謂ふ」と「三尺の童子も必要としない」評語をつけているものがあるといって、既存の評点本、注釈本が不必要なところにまで評語をつけていることを批判している。これは、凌濛初が簡潔な評語を理想としていたことの延長線上にあるものであり、一つ一つの評語の簡潔さだけでなく、評語をつける箇所も必要十分でなければならないという考えを示したものであろう。

凌濛初は既存の版本の中でもいわゆる徐文長本と王伯良本を名指しして批判しており、特に王驥徳には手厳しい。たとえば凡例の次の項目には下のよういう。

近く改竄本有り、一は徐文長と稱し、一は方諸生と稱す。徐、贗の筆なり。方諸生、王伯良の別稱なり。……徐の解は牽強にして迂僻、人をして勃勃とせしむ。王伯良は儘に心ひたすらを此の道に留むる者、其の辨析確當なる處有り、十にも亦た時に二三を稱す。但だ其の胸中に癩有り、故に其の好む所に阿り、悍然として筆削し、而して又大いに村の學究の四書を訓詁するに似るを惜しむべきと爲すのみ。

（近有改竄本、一稱徐文長、一稱方諸生。徐、贗筆也。方諸生、王伯

良之別稱。……徐解牽強迂僻、令人勃勃。王伯良儘留心於此道者、其辨析有確當處、十亦時稱二三。但其胸中有癩、故阿其所好、悍然筆削、而又大似村學究訓詁四書爲可惜耳。) ³⁶

前の項目で例示された「兜率宮・武陵源・九里山・天臺・藍橋の類」についても、王伯良本（万曆四十二年（一六一四）序王驥徳校注『新校注古本西廂記』）では「兜率宮」・「九里山」・「藍橋」の三語について典故を説明しているし、「孤孀」の二字につけられた注についても、王伯良本第一折の最初の曲「賞花時」の注にまったく同じ一文が見える。凌濛初は王驥徳の校注が懇切丁寧に語釈や解説を加える方法をあまり好まなかったようである。 ³⁷

それに対して凌濛初の評語は元曲に関する知見を述べたり、古本と時本の比較を行ったり、或いは音韻についての解説をしたりと、豊富な知識が惜しみなく披露されており、あくまでも『西廂記』を戯曲として鑑賞するため、曲学の視点から評点を付すというポリシーが見てとれる。つまり、こまごまとした注釈や評点がなくとも作品を読むことができる、従来評点を快く思わなかったような一定の知識をもった読者層を想定し、そういった人たちに対して付加価値を高めることができる評点本を目指していたのではないだろうか。

続く『琵琶記』も『西廂記』同様古本に忠実なテキストを志向して出版されたものであり、現存の版本の中でも古い形を残す版本に分類されている。 ³⁸『琵琶記』では他人の評語を引用せず自分の評語だけで評点を付し

36 前掲『善本西廂記二種』所収凌濛初刻『西廂記』「凡例」、五～六頁。

37 王驥徳の『西廂記』の注は経書の注釈に非常に近い形式で行われており、凌濛初は特に文章の前後のつながりにこだわる点を「大似村學究訓詁四書」と揶揄している。しかしのちの毛奇齡は更にその前後の呼応関係にこだわって『西廂記』の論理的構成に着目した注釈を付しており、「戯曲批評の学問化」の傾向と指摘される。廣瀬玲子「西廂記の「注疏」—王驥徳・毛奇齡による戯曲の読解—」（『東洋文化研究所紀要』一三九、二〇〇〇）、同「西廂記の曲と白—（続）王驥徳・毛奇齡による戯曲の読解—」（『専修人文論集』六十九、二〇〇一）参照。

38 田仲一成「十五・六世紀を中心とする江南地方劇の変質について—5—」（『東洋文

ているほか、「解證」もなくなっているが、その傾向に大きな違いは見出だせない。その凡例でも、世の中に出回る評点本等への不満を垣間見せる。

曲中の妙處、専ら當行本色の俊語を取り、麗藻を取るに非ず。今人曲を選ぶに、但だ「新篁池閣」、「長空萬里」等を賞するを知り、皆な真面目を識らず。此の本の丹鉛を加ふる處、必ず曲家の勝場、知る者自ら辨ず。近時に至りては贗の李卓吾の批點本有り、夫の真の卓吾すら且つ曲を解せず、況んや顰みに効ひ唾を拾ふ者、ますます論ずるに足らざるなり。

(曲中妙處、專取當行本色俊語、非取麗藻。今人選曲、但知賞「新篁池閣」、「長空萬里」等、皆不識真面目。此本加丹鉛處、必曲家勝場、知者自辨。至近時有贗李卓吾批點本、夫真卓吾且不解曲、況効顰拾唾者、益不足論矣。)³⁹

ここでは曲中のよいところは、もっぱら当行本色の俊語、つまり曲律にあった優れた語をとるのであって、麗々しいところをとるのではない。近頃の人は曲を選ぶにあたって「新篁池閣」、「長空萬里」といった曲をはめるばかりで、本当のところをわかっていない。この本で丹鉛（朱墨套印本で朱色で付される評点）が付されたところは、必ず作曲者の技が見られるところである、見識ある人は自ずとわかるであろう。最近では贗の李卓吾による批評本というものがあるが、真の李卓吾ですら曲を解さなかったのだから、その真似事をする者に至っては、ますます論ずるに足りない、という。前半の「新篁池閣」、「長空萬里」云々というのは、おそらく主として王世貞について述べたものである。「新篁池閣」、「長空萬里」はそれぞれ凌濛初本『琵琶記』でいうと卷三第二十一折「梁州新郎」、第二十七折「念奴橋序」の最初の句である。凌濛初は、散曲集『南音三籟』に付された「譚曲雜筭」においても、王世貞の曲に対する評価を批判する中でこの二曲を

化研究所紀要』七十二、一九七七)。

39 孫崇濤主編『古本琵琶記匯編』（中華書局、二〇〇七）所収『凌刻麗仙本琵琶記』、十六頁。

取り上げている⁴⁰から、ここでもそのことを述べているのであろう。更にいわゆる李卓吾批評本を槍玉にあげており、『琵琶記』についても凌濛初が世に出回る評点本の類に広く目を通していたことがうかがえるだろう。

更に、本来、評点と本文のテキストは別々の人によってなされる別個の存在であるから、本文を評価したり批判したりすること自体はさほど不思議なことではなかろう。しかし、凌濛初は評点と本文との間の一体感を強く求めていたように見える。劉辰翁の評点を好んで出版した背景にも、同様の理由があるようだ。中唐の詩人李賀の詩集『李長吉歌詩』については、劉辰翁ひとりの評点をそのまま採用し、その跋で劉辰翁について次のように述べている。

先輩の善く詩を言ふ者を稱するに、咸宋の劉須溪先生を服膺す。李文正公の『麓堂詩話』、其の語簡にして意切、別自の一機軸にして、諸人の詩を評する者皆及ばざると稱するは、良に然り。杜少陵より以下諸名家皆評有り、而して其の長吉に於けるや擊節^{いよいよ}彌甚だし。盖し長吉譎怪にして、先生も亦た刻意摹索して得る有り。千年長吉甫めて知己有りと謂ひ、以て樊川^せを誚むるに至りては、知己たるべきを雅^{はなは}だ自負す。

(先輩稱善言詩者、咸服膺宋劉須溪先生。李文正公『麓堂詩話』稱其語簡意切、別自一機軸、諸人評詩者皆不及。良然。自杜少陵以下諸名家皆有評、而其於長吉擊節彌甚、盖長吉譎怪、先生亦刻意摹索而有得。至謂千年長吉甫有知己、以誚樊川、雅自負可知己。)⁴¹

ここで凌濛初は劉辰翁の評点について、その簡潔さと本文のテキストへ

40 「然元美……安得不擊節於新篁池閣、長空萬里二曲、而謂其在拜月上哉。琵琶全傳自多本色勝場、二曲正其稍落游詞、前輩相傳、謂爲贗入者、乃以繩拜月、何其不倫。」と見える。上海古籍出版社『續修四庫全書』第一七四四冊『南音三韻』、二一一頁。

41 ハーバード大学燕京研究所蔵朱墨套印本がオンラインで公開されている。該当箇所は Seq.107 (URL : <http://pds.lib.harvard.edu/pds/view/50421563?n=107&printThumbnail&s=no&oldpds> 最終閲覧日二〇一八年五月二十八日)。

の深い理解の二点を挙げて称賛する。まず前者については、李東陽（文正は諡）の『懷麓堂詩話』が劉辰翁の評点について簡潔で的を射ていること、独自の機軸を打ち出していることを称賛する記述を引用している。これは『世説新語』において劉辰翁の評点を「譚言微中」と称したことと通じる内容であろう。そして、杜甫以下の諸名家にはみな評があるが、こと李賀に関しては、李賀の難解さのゆえか、やたらに称賛するばかりである。劉辰翁先生もまた苦心して模索した結果得るところがあった、と評価する。

そして、劉辰翁が千年を経て長吉に初めて知己ができたといって杜牧（樊川は字）を責めているというのは、劉辰翁が杜牧の「李長吉歌詩叙」に付した眉批を念頭においたものであろう。その劉辰翁の眉批というのは、

舊く長吉の詩を看るに、固より其の才を喜び、亦た其の澀を厭ふ。落筆して細かに讀みて、^{はじ}方めて作者の用心を知る、料に他の人觀るに此に到らざるなり。是れ千年長吉猶お知己無きなり。杜牧の鄭重に叙を爲し、直だ二三歌詩を取りて而して止むを以て、始めて牧の未だ嘗て讀まざるを知るなり、即ひ讀みても亦た知らざるなり……

（舊看長吉詩、固喜其才、亦厭其澀。落筆細讀、方知作者用心、料他人觀不到此也。是千年長吉猶無知己也。以杜牧之鄭重爲叙、直取二三歌詩而止、始知牧未嘗讀也、即讀亦未知也……）⁴²

などと述べて杜牧の読みの浅さを半ば嘲り、自分は難解な李賀の詩を深く読み込んで理解したと自画自賛する内容のものである。劉辰翁がいうように、作品の羽翼となる評点を付すには、まず作品を正しく理解する必要がある。劉辰翁は過去の文人の作品を深く読み込み、まるで作者と同化するような読み方をしていたことが同時代の文人にも評価されている。⁴³ 凌濛初はこうした劉辰翁の姿勢に共感を覚えていたのであろう。

また劉辰翁の評点を高く評価するにあたり、むやみに称賛を重ねるだ

42 前掲『凌濛初全集』第六冊『李長吉歌詩』、二頁。前注に挙げたハーバード大学燕京研究所蔵朱墨套印本ではこの部分が欠けている。

43 奥野新太郎「劉辰翁の評點と「情」」、(『日本中国学会報』六十二、二〇一〇)。

けの評語を対照的な存在として挙げているのを見ると、これもまた『後漢書纂』、『世説新語』に見られた評点否定の発言が、世の中の評点本に見られる「評価」、「批評」ばかりに偏る評語に向けられたものであることを裏付ける記述であるといつてよいのではないだろうか。

このように、朱墨套印本時代の凌濛初は、評点全体を否定するような曖昧な発言をするのではなく、その批判の矛先をはっきりと既存の評点や注釈の手法に向けている。朱墨套印本という評点が必要不可欠な形式で出版を行うようになって、より評点に対して具体的な考え方をもつようになったことの表れであろうか。しかし凌濛初が理想とする評点の核心部分は、『世説新語』や『後漢書纂』の時点から変化しておらず、凌濛初は一貫して真摯な態度で評点に取り組んでいたことがうかがえる。そして、評点における俚俗さを払拭し、一定の知識をもった読者に対しても価値のある評点を実現しようとする姿勢が顕著になっているといえるのではないだろうか。

おわりに

以上、凌濛初と評点本のかかわりと、評点に対する見解を見てきた。評点本隆盛の時代に出版業にたずさわり、評点本を数多く出版した凌濛初であるが、世の中に広く出回っていた本文のテキストの毀誉褒貶を主とするような評点本には少なからず不満を持っていた。凌濛初にとっての理想の評点は、本文のテキストの「羽翼」たるべき存在で、本文をほめたりけなしたりするのではなく、本文の真価を発揮させる助けとならなければならなかった。そのためには、評語はむやみやたらにつけるのではなく、必要な箇所のみ、簡潔で的を射た評語をつけなければならない。そして大前提として評者が作品の本文を深く正しく理解していることが求められる、という凌濛初の見解が凌濛初の出版した書籍の序や凡例から読み取ることができた。そして凌濛初はその理想を実現するべく、市場に出回る他の評点本や注釈の類に広く目を通し、本文、評点の双方に気を配って、よりよい書物を作ろうとしていたこともうかがえた。また初期に出版された『後漢書纂』『世説新語』においては、まるで評点を否定しているかのような

発言が見られるなど、未だ評点に対してやや曖昧な記述があったが、朱墨套印本を出版するようになってからはそうした発言が見られなくなり、より積極的に評点本の価値を高めようとする姿勢が顕著になったように見受けられた。

なお、本稿では、凌濛初が評点について述べている記述を取り上げ、凌濛初が評点というものをどのようにとらえていたのかを考察してきたが、評点者としての凌濛初の功績を正しく知るためには、それぞれの書物に付された評点を詳しく見ていかなければならないだろう。「二拍」のような例を除いて、凌濛初が出版した書物の多くは、他人の著作物に評点を付したものである。凌濛初自身が著した序や凡例の類を除けば、凌濛初自身の考えを読み取ることができるのは、ほぼ評点部分だけといえる。その評点部分に凌濛初が真摯に取り組んでいた以上、凌濛初の学識や思路を知るためには、凌濛初の評点により注目していく必要があるのではないか。

たとえば曲学的な解説に注力した戯曲『西廂記』、『琵琶記』、散曲集『南音三籟』からは戯曲に対する学識や志向を知ることができようし、他の評点者との傾向の違いも少なからず見てとれる。『世説新語』には本文に対する凌濛初の感慨や創作手法に対する評語が多数残されており、凌濛初の思想の一端を知ることができよう。また「二拍」の場合、本文、評点ともに凌濛初の手によるものであるから、評点に着目することによって凌濛初が作品にこめた思いをより正しく読み取ることができるのではないか。今後は個々の作品における評点の分析を通し、凌濛初という人物とその功績をよりよく知る手がかりとしたい。